MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２４．４．２４　発行元
第 569 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

佐伯泰英「ベスト表」(再掲)

時代小説・剣豪小説で一大ブームを引き起こしている佐伯泰英の初期の頃のミステリ作品について取り上げる。ミステリの数はそう多くはないが、どれもサスペンスに満ちていて、読者を惹きつける魅力がある。

ミステリ作家としての佐伯泰英

経歴を読むと、佐伯泰英はミステリ作家としては売れなかったようである。書いても書いても売れ行きが上がらず、出版社の方から方向転換を迫られたようだ。それで時代小説家としてベストセラーになるのだから、世の中本当にわからないものである。

私はミステリしか読まないので時代小説の方はわからないのだが、ミステリの方も読んでみれば抜群に面白いのだ。どうしてこれが売れないのか？と不思議に思う。「佐伯泰英のミステリも読んでくれ！」と世の中の人に訴えたい。

もちろん、ミステリとしては「本格もの・謎解き」ではない。ハードボイルド的な人物の描き方で、中身は国際謀略、スパイもの風のサスペンスである。作者のストーリーテーラーぶりが遺憾なく発揮されている。読者を楽しませてくるエンタテインメントとしてのサービス精神に溢れている作品群だ。

《佐伯泰英ミステリ・ベスト表》

１．ピカソ青の時代の殺人
２．ゲルニカに死す
３．暗殺者の冬
４．サイゴンの悪夢
５．神々の銃弾
６．五人目の標的
７．銀幕の女
８．ユダの季節
９．野望の王国
１０．復讐の秋　パンパ燃ゆ
１１．悲しみのアンナ
１２．テロルの季節
１３．ヨハネの首
１４．ダブルシティ
１５．眠る絵
１６．幻夢　イルシオン

『警視庁国際捜査班』シリーズは祥伝社文庫。『ピカソ』『ゲルニカ』はハルキ文庫。『ユダ』『テロル』は双葉文庫。

『悲しみのアンナ』

１９９５年祥伝社ノン・ノベルで出版された時の題名は『妃(フェイ)の正体』だった。私の手元にあるのは２００４年の祥伝社文庫。『五人目の標的』に続く『警視庁国際捜査班シリーズ』の第二作になる。話の中心になるのは警視庁の犯罪通訳官のアンナと国際捜査課のクゲ(公家)マロこと根本清磨刑事。アンナの本名はアンナ・マリア・スタインベルク・ヨシムラと言い、日系アルゼンチン人で、ラテン系の犯罪者の通訳として警視庁内で重要な役目を担っている。

根元が横浜中華街でアンナを待っていると、携帯電話が鳴り「アンナの身柄を預った」との話が聞こえ、一方的に切れた。根元がその日のアンナの動きを調べてみると午後に府中刑務所に行ったことが判明した。そのまま刑務所に向かうと、アンナが面会したというコスタリカ国籍のホワンが首を絞められて殺されている現場に出会った。そして、根本の元に血まみれの指が届けられてきた…。この後話はマカオに飛び、現地で射殺された東京入国管理局職員の中河千里の事件が絡んでくることになる。国際的に広がる犯罪組織のようなものが見えてきて…。根本はアンナを救い出すことができるのか…。すばやい展開で読者を惹きつけていく手際の良さはまさに佐伯泰英作品そのもの。登場人物の描き方も佐伯ワールドを感じさせる。

『ピカソ青の時代の殺人』

１９９２年集英社。『小説すばる』に連載された後単行本になった。私はハルキ文庫版で読んだ。『ゲルニカに死す』とペアになったスペインものの傑作。「青の時代」というのはピカソの青年期の作品群を指す。友人が亡くなったことにショックを受け、青い絵具を使った暗い雰囲気の絵を描いた時期。もちろんキュビスム以前の作品で、ピカソの発展途上の段階のひとつである。

物語は東京・府中の東京競馬場の駐車場から始まる。馬頭の紋章のついたロールスロイスの車の中で死体が発見された。火で焼かれていたが、顔だけはきれいに残されていた。緑色の絵具で死化粧された形で…。府中署刑事課の夏苅真左が捜査に当たる。銃撃によって亡くなった被害者は西洋骨董店の経営者・阿澄林成。前日、三億から四億する絵画の取引を会社社長に持ちかけていたらしい。若き日のピカソが描いたと思わしきもの…。夏苅はこの後の捜査の展開の中でスペイン・バルセロナに行くことに。(なんで一警察官がスペインに…とは思うけれども…)　そして画廊でアルバイトをしていた三枝しおりも絵の真贋を確かめる意味でスペインに渡ることになった。ここからが本番で、連続殺人事件が起こり、映画のようなスピード感に溢れた流れが進んでいく。ピカソの「青の時代」の解説も…。スペインの風景・歴史も踏まえて、異国での活劇が繰り広げられる。そして最後にたどり着く結論は…。佐伯泰英の本領が発揮された作品と言える。